

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2026春 No.129



萩焼は毛利家の庇護に始まる

本年度の財団の晴友会の研修旅行は萩・津和野を巡る旅となりました。大陸から陶工を迎えて始まったと伝わる萩焼の故郷のひとつにお邪魔しました。萩の土は独特の土作りから始まる事がわかって、いろいろとテイストの違う特徴を持った萩焼の秘密がちょっとだけ理解できました。登窯もそれぞれ個性的でした。(坂倉新兵衛窯にて)

- 令和八年の初釜について
- 仁尾八朔人形祭り守りびと
- お茶室は自由な空間
- 3月から5月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212
2026年春号 No.129 3月1日発行(季刊)

令和八年の初釜について

とき 令和八年一月十八日
席主 裏千家直門志俱会会員 鈴木宗博



本年の財団の初釜は、淡交社の『なごみ』で「どうぞお菓子を」のコーナーを担当される和菓子研究家で、裏千家学園の講師もされている鈴木宗博先生とお社中の皆様にお席をお願いして開催いたしました。

御一行は、バスを仕立てて、栗林公園も楽しんで到着されました。茶会当日は先生のお誕生日ということもあって、終始にぎやかに楽しいお茶席を運営して下さいました。とても華やかな雰囲気です晴らしい初釜が出来て、感謝いたしております。

令和六年度の財団主催あ・うんの数寄講座「茶の湯をさらに楽しむ夏期講習」第四回目「茶席の和菓子で楽しむ」と題してご講演いただいたご縁で今回の初釜茶会が実現しました。

茶席の話題は茶道具だけではなく、菓子銘や「お製はどちら」と和菓子店が尋ねられ、季節や年中行事に因んだ菓子の話で座が弾みます。私的には、美味しいお菓子につられてお稽古に通った遠い昔、大寄茶会で菓子をなかなか口にしない正客をさしおいて食べるわけにもいかず怨めしく眺めたこと、逆に、手を付けるのが勿体ないような菓子の美しさに見惚れた記憶など、不埒な思い出に赤面する思い出が交じります。

裏千家茶道教授で幕府御用菓子司・鈴木越後を先祖にもつ和菓子研究家の鈴木宗博先生は、夏の講座の中で「季節や情景、雰囲気までも感じさせる茶花や茶菓子があって道具組が完成する」こと

を、「菓手に助けられる」と大変印象的な言葉で表現されました。時には、茶菓子職人に無理難題を提案して少人数分の時ではとんでもない請求金額になることもあるが、新しい茶菓子を考えるのはとても楽しいといたざらっぽくおっしゃたことも心に残っています。図らずも今回、その如実な例とも言うべき茶菓子の数々を楽しませていただきました。

茶会は寄付での裏千家十三代家元円能斎筆による軽妙な宝舟の絵の拝見から始まりました。円能斎は明治期に女学校教育の礼儀作法の一環に茶道を取り入れ、女性だけでなく一般社会にむけて茶道の大衆化を図った功績大なる人です。

炉に据えられた天猫・線口釜から湯の沸く微かな音だけの静かな茶室の床に、鈴木家と懇意だった円能斎の「榭」一字。漢字のツクリ部分・神の縦棒を長く引き下の方に短い横線ひとつ、止まり

中條文化振興財団 令和八年初釜 会記

とき 令和八年一月十八日
席主 裏千家教授 鈴木宗博

濃茶席

寄付

床 円能斎筆 宝舟

本席

床 円能斎筆 榭

香合 玄々斎在判箱 相馬焼馬の絵

釜 線口釜 大西清右工門極

炉縁 沢栗

水指 古備前瓢形 又妙斎箱

茶器 瀬戸肩付 銘 閑坐 鵬雲斎箱

茶杓 円能斎作 銘 金剛杖

茶碗 ノンコウ七種之内黒拵写 淡々斎箱 弘入造

替 黒茶碗 銘 不識 鵬雲斎箱

蓋置 青竹 十代大樋造

建水 結紐詩絵銀溜

御茶 松花の昔 雅峯造

菓子 菱葩餅 丸久小山園詰 老松製

菓子器 日の出菓子盆 象彦造

薄茶席

床 鵬雲斎筆 無事は安穩

花 雲龍梅 曙椿 秀斎造

花入 御神酒筒

琵琶床 佐渡島 民芸 藁馬

風炉先 鹿沼組子

釜 撫肩平古鏡釜

炉縁 唐松詩絵黒炉縁 鵬雲斎在判

長板 黒真塗 鵬雲斎箱 一瓢斎造 表朔造

道也造

木に今日庵と小さめの揮毫の確かさ、手前に飾られた祇園八坂神社の神楽鈴に結んだ五色の布緒が鮮やかです。

話は本日の真骨頂、主菓子の菱葩餅の話に移りました。定番通り円形に薄くのばした白い求肥に、紅色の求肥と白味噌餡、甘煮牛蒡をのせて二つ折りにしたのですが、これが何とも堂々とした豊かさ、ふんわりした優雅さで、製は京都老舗の有職菓子御調進所・老松。平安時代の宮中正月行事、長寿を願う歯固めの儀が元になった宮中の雑煮を初釜恒例菓子にした由来を伺いながら、こちらは菓子席の半東の指導通り、円錐形に折った懐紙に包み込んでたつぷりとした蜜を吸うようにして「クレープみたい」とはしゃぎながらいただいた感想を申し上げましたが、たつぷりの蜜を薄くやわらかな求肥で覆う技、一步油断するとペラペラ求肥で蜜を包み込んだプクプク菓子になりそうなどころを、絶妙な豊かさと優雅さ、また、ほんとうに薄く柔らかい求肥を白と紅の二色重ねた色合いを何とも上品に仕上げた菓子職人の技術に感歎の声しきりでした。



後の薄茶席で亀廣保製の型押し絵馬と有平糖の人参をいただきましたが、赤い人参に緑の葉軸を一つずつ挿していく工程で二色の餡の固まり具合に難儀したであろうことを思いながら、午年に困んだ馬の餌・人参と洒落た先生の着眼に拍手しました。

広間の薄茶席、琵琶床に民芸品の藁馬、棗や主茶碗に馬の絵、干菓子は絵馬、有平糖の人参と午年に困んだ道具揃えの最後に、全員に馬上杯の茶碗で二服目の薄茶が振る舞われました。思いがけないお年玉、午年に絶妙な馬上杯。戦場を征く武將、あるいは草原を逍遙する詩人の騎行を思い乍ら、高く肘をあげた片手で飲み干しました。

ちなみに、鈴木先生が連載中の「どうぞお菓子を」二月号には「土地に根つき、近隣の人に親しまれ、やがてお世話になった人や親しい人の手土産となり、また、おもてなしの茶席菓子として、多くの人に愛される菓子へとなっています。」と茶席の菓子だけでなく、日常の菓子にも優しい目線で綴られています。



点心席

水指	鈴 坐忘齋箱		
茶器	淡々斎好在判箱 神馬棗		
茶杓	円能斎作 銘 松飾		
茶碗	尾戸焼馬の絵 円能斎箱		
替	伊賀手姥ヶ餅 円能斎箱		
替	色絵 松竹梅 寿 淡々斎箱		
建水	菊モール		
水次	御所茶缶		
御茶	大福茶		
菓子	絵馬 人参		
菓子器	淡々斎好在判 雙鶴盆		
蓂盆	一閑蓂盆		
火入	瓢松唐草		
床	塩川文麟筆 小供遊		
花	紅梅侘助 太郎庵		
花入	紙風船		
		平安孝造	
		以上	
			十代浄益造
			妙全造
			浄益造
			治良兵衛造
			丸久小山園詰
			亀廣保製
			柳庵造
			後藤造
			浩人造



仁尾八朔人形祭り

令和7年度
助成事業

守りびと

瀬

戸内の海に寄り添う香川県三豊市仁尾町。この町では、旧暦八月一日、八朔の日になると、人形が町に息づく独特の伝統の祭りが開催されてきました。仁尾八朔人形祭りです。子どもの健全やかな成長を願い、おとぎ話や歴史の名場面を模した人形舞台を町の軒先に飾るこのお祭り。通りを歩けば人形と目が合い、足を止めれば物語が立ち上がる——町そのものが舞台となる、仁尾ならではの祭りです。

1998年に商工会主導で再興されて以降、祭りは「秋の風物詩」として町に定着、スタンプラリー形式で人形を巡る仕掛けも相まって、世代を超えて親しまれてきました。2003年にはふるさとイベント大賞最高賞を受賞し、全国的な知名度も獲得。しかし人手不足と高齢化の影響は大きく、2024年祭りは中止となり実行委員会も解散、人形や道具は譲渡または焼却処分しかない状況にまで追い込まれました。後継者不在という現実のなかで、長く続いてきた人形たちの命は風前の灯火でした。

その光を再び灯そうと、2025年3月、地元事業者の有志が集い新たな実行委員会が発足します。地域おこし協力隊として活動する私もその一員となり、規模を縮小しながらも、現代の感性を取り入れた新たなスタイルでの復興開催に取り組みました。完全な再現ではなく、「続けること」を選ぶ。その判断が次の一歩となりました。

2

025年9月15日、二年ぶりとなる仁尾八朔人形祭りは、町の信仰の中心を担う賀茂神社を舞台に甦りました。町歩き形式は叶いませんでしたが、長床に五つの人形舞台を設え、境内ではマルシェや獅子舞、音楽演奏を実施。夕暮れから始まった盆踊りでは、地元の人、移住者、外国人観光客が一つの輪となり、太鼓の音に身を委ねました。そこには、祭りが人と人を結び直す力が確かにありました。

人形舞台は、以前の記録写真を手本としながらも、映像プロジェクトや照明、音響を用いた新たな演出を試みました。徳川家康の舞台では、月と城影、父母ヶ浜の風景が重なり、時空を超える旅路を描き出します。川中島の戦いでは、山や川が動く映像によって臨場感を演出。桃太郎の鬼との決闘シーンは、新たに製作された岩場と流木によって力強く立ち上がり、製作には多くの地元住民のボランティアの力が注がれました。かくや姫の舞台では、倉庫に眠っていた人形



や小道具を生かし、幻想的な映像演出を加えることで、新たな夢のような空間を創出しました。

なかでも大きな見どころとなったのが、仁尾町に代々続いてきた人形店のご子息でおられる、真鍋芳和さんによる真田十勇士です。真鍋さんは貴重な人形飾りを提供するだけでなく、経験の浅い私たちの飾りにも丁寧な助言をくださいました。勇ましく並ぶ十勇士の両脇には、かつて日本最大級を誇った雛壇や兜が据えられ、八朔人形祭りが積み重ねてきた時間の流れを静かに語っていました。

開催中、境内には途切れることなく人の流れがあり、地元の高齢の方々からは「またこの祭りが見られてうれしい」という声が多く寄せられました。子どもたちは張り子の虎やジオラマに目を輝か

せ、新たに加えた盆踊りも多くの人が参加していただきました。地元テレビ局や新聞社にも多く取り上げていただき、伝統文化の継承に一つの希望を示す貴重な機会となりました。

今回、人形舞台の製作・演出に携わるなかで、人形飾りが持つ繊細さと芸術性の深さを実感しました。角度や構図、光の置き方ひとつで、表情は大きく変わります。自由な発想でこの「見せ方」の質を高め、幅を広げることが、祭りを未来へつなぐ鍵になると感じています。実行委員会ではすでに来年の開催を見据え、準備を始めています。

この町の人形たちが、これからも目を覚まし続けられるように——その思いを胸に、歩みを進めていきます。

(前納依里子)



お茶室は

自由な空間

茶室の維持管理について

弊財団のお茶室「美藻庵・晴松亭」は、この4月で竣工から30年を迎えます。茶室としてはまだまだ新しいですが、新築の時と比べるとそれなりに少しずつ風格のようなものが、出てきたかもしれせん。市中の山居として、山深い感じの露地もやっと落ち着いて来たと思います。

数寄屋建築の伝統的な茶室は大工の技の集積で、時の経過を見据えて丁寧に造られています。木下孝一棟梁も「この茶室がそれなりになるには今から35年かなあ」と感慨深げに仰っていました。

数寄屋は、現代の日本の建築基準法とは考え方が大きく違う事と、伝統的な自然素材の建築材料などが手に入り難い状況を考え合わせると、今後同じ様な建築物を建てるのはとても難しいそうです。それは兎も角、本格的なお茶室というのはいつとも凜とした空間でなければなりません。

建物というのは、人が使っていないと劣化しますが、使っているとそれなりに消耗します。さらにエアコンなどの現代の設備は、交換が必要になります。



建てるのも大変ですが、常に茶室を保障なく使えるように維持管理する事は、更に重要となります。

伝統を守るために

今、全国にある伝統的なお茶室の多くは、釜に湯を沸かすための炭火が使えないところが増えていきます。炭を入れる炉壇は、土で出来ているので、左官の仕事です。

例えば、畳が必要な美術館の展示施設では、今後イグサの畳ではなく紙で出来た畳に順次変わっていきます。

左官仕事も畳の交換も茶室の維持管理には大切な伝統的な職人の仕事です。茶

室にとっては言わば消耗品です。しかし、普段の生活の中から消えてしまった本物の畳は、イグサの生産現場から熟練の職人さん育成までを脅かしています。今後いつまでその技術が保持されるかどうかの予測がつかない状況です。利休さんの時代から続く茶室の畳は、独自の約束事も多く現代では特殊な畳なのです。

室内にとっては言わば消耗品です。しかし、普段の生活の中から消えてしまった本物の畳は、イグサの生産現場から熟練の職人さん育成までを脅かしています。今後いつまでその技術が保持されるかどうかの予測がつかない状況です。利休さんの時代から続く茶室の畳は、独自の約束事も多く現代では特殊な畳なのです。

新しい試みと可能性

茶室の維持管理に必要な経費は弊財団の場合、年間4回の庭木の剪定などの手入れ、何年か毎の畳の入れ替えや炉壇の塗り直し、適宜必要な建物本体のメンテナンスなど併せて、年間に約300万円以上掛かります。職人さん達との日々の連携はとても大切です。

最近では、新しい試みとして高校生の茶道部とのお茶会を支援させていただいています。実際に子供達の成長を間近に見せていただきながら、更に充実させて行きたいと考えています。この事業は「若人茶会」として行いますので、高校生に限らず大学生や中学生以下のお茶会のご支援も出来たらと、子供達を指導されているお茶の先生方に、適宜アプローチしています。

現代でも、茶人という人は、自分のこだわりの茶室を求めて、日々新しい茶室が産まれて来るのはとても興味深い事ですが、多くの場合、生活空間の中に組み込まれた特別な場所になっています。

そしてこの事は、茶室をお茶会以外での自由な利用の可能性にも広がるのではないかとちょっとワクワクしています。これまでも、演劇や日本舞踊。邦楽器や室内楽のコンサートなども開催して来ました。ギターなどなど弦楽器とは特に相性がいいと思います。一度に入れるお客様は、40名様くらいなので、小さい催しになるかもしれませんが、最近はその規模の密度の高い催しが好評を博しているのです。新たな舞台の可能性として、考えていただければ、ありがたいと思っております。そのための見学なども随時受け付けておりますので、ご遠慮なくお気軽にご相談ください。

弊財団の茶室の中は、普段は何もありません。貸し茶室としてベーシックに維持管理しながら運営していますので、お茶席をされる亭主の個性が、際立ちます。

個人の茶事から、一般向けの大寄せまでの茶席が可能で、動線もとても使いやすいのではないかと自負しています。全体の構成は四畳半台目の小間と二間続きの広間と立礼席です。それぞれに水屋と別に広い台所もあります。

さて、数寄屋建築というのは、部屋の仕切りが、障子や襖などの建具になって

よるしくお頼みいたします。

よるしくお頼みいたします。

よるしくお頼みいたします。

鮮やかなピンクが春を呼びます

瀬戸内で春を告げるものはたくさんありますが、その中でも代表的なのが桜鯛。

この時期の真鯛は産卵期を迎え、雄雌共に鮮やかな桜色に染まります。

特にオスは顔がより鮮やかなピンクに染まり、その中に白い斑点が現れ、桜の花びらを散らしたように華やかになります。

釣り師たちには「乗っ込み真鯛」と呼ばれ、型も大きく、数が釣れるので春先の絶好のターゲットとして多くの釣り船が繰り出します。

そんな桜鯛を思わせるのが「めで鯛もなか」。明石の風物にちなんで作られた鯛の形をしたもなかです。

外から見えるほどたっぷりのこし餡が詰められていることから、笑いもなかとも呼ばれるそうです。

お店は明石にあるので関西に足を伸ばされたついでに春を満面の笑みで味わってはいかがでしょうか。

おめで鯛ということでハレの日にも最適なお菓子です。



お茶の風景(31)

和敬清寂

茶席の第一義とされる掛物に春懐紙、夏短冊、秋消息、冬一行の例えがありますが、有名な一行物の文言に「和敬清寂」があります。主客が互いに和やかに敬いあい清らかに茶を楽しむという利休の精神や心得が、香川県庁舎(東館)の壁画アートになりました。

戦後の民主主義を体現して広く県民に開かれたデザインのリ庁舎は、鉄筋コンクリート造の建物に日本の伝統的表現が評価され、昭和三十三年竣工以来、今日の耐震改修工事も終え国の重要文化財に指定されました。設計者の丹下健三はエントランスホールの床の御影石、コンクリートの柱や梁など建築資材そのままの単純な色だけの空間に、対照的な明るく強い色の壁画を猪熊弦一郎に依頼し、エレベーターや階段、トイレを囲んだ四面に建築と一体化したアートを完成させました。太陽や月をイメージしたタイル壁画の作者は、茶の神髄である和敬清寂をデザインしたと言っています。



おいでまい香川

香川県内の様々なイベント情報を随時更新中!



<https://oidemai.kagawa.jp/>

財団行事予定

(3月~5月)

休館日水曜日

お申込みは財団まで。急遽中止になる事もあります。

3月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
3月3日(火)午前11時
- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
3月6日(金)・20日(金)午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
山下純子先生
3月7日(土)・14日(土)午後1時~
- ◆ 和菓子講座 毎月第2金曜日
高橋初乃先生
3月13日(金)午前10時~12時
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
3月17日(火)午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。
(お弁当は予約制)

4月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
4月3日(金)・17日(金)午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
4月4日(土)・11日(土)午後1時~
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
4月10日(金)午前10時~12時
- ◆ 月に一度の喫茶室
4月21日(火)午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。
(お弁当は予約制)

5月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
5月1日(金)・15日(金)午前10時~12時
- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
5月5日(火)午前11時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
5月8日(金)午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生

毎月第2・第4土曜日
5月9日(土)・23日(土)午後1時~

- ◆ 5月月釜 五人様茶会
「初めての財団のお席、不慣れな事も多い事かと思いますが、最善をつくして心よりお待ち申し上げます」と席主のメッセージを添えてご案内いたします。
日時 5月10日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 江戸千家 二宮宗恵
薄茶 江戸千家 村上宗民
会費 10,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間(各席6名・2時間15分を予定)
第1席 9時 第2席 10時30分
第3席 11時15分 第4席 12時45分
(各席A席・B席)
申込 電話受付 3月23日(月)10時~
- ◆ 月に一度の喫茶室
5月19日(火)午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。
(お弁当は予約制)

茶華道ガイド

急遽中止等の変更となる場合があります。

一般財団法人小原流高松支部 TEL (0879) 82-6580

4/25、26 みんなの花展 高松支部小豆島地区花展「醬のかおり」
席主：小原流高松支部
小豆島オリーブ公園サンオリーブ
無料 10:00～17:00 (26日は16:00まで)

華道一生活 TEL (087) 821-4347

5/31 鬼子母神尊夏祭 奉納いけばな展・茶会
席主：茶道石州流浮瓢会高松 会長 今岡宗君
妙本寺(本覚寺別院) 1,000円 9:00～15:00

茶道裏千家淡交会香川支部 TEL (0877) 62-4155

4/5 桜まつり 席主：多度津分会
桃陵公園 藤棚 500円 10:00～14:00
4/19 正御影供 席主：善通寺教授者(献茶：山下宗由)
総本山善通寺 800円 10:00～14:00
4/29 瀬戸大橋展望茶会 席主：坂出分会
瀬戸大橋記念公園刻月亭 600円 10:00～14:00
4/29 若葉茶会 席主：観音寺教授者
琴弾公園浴日館 無料 9:00～14:00
5/10 パラ園茶会 席主：坂出分会
坂出番の州公園5番地 400円 9:30～14:00
5/10 淡交会香川支部 月釜 席主：松田宗真
多度津町地域交流センター2F 800円 9:30～15:00

茶道裏千家淡交会高松支部 TEL (087) 841-0605

〈高松支部月釜〉 大西・アオイ記念館
4/5 席主：井上宗智 1,000円 9:30～15:00(時間指定)
6/7 席主：岡 宗扶 1,000円 9:30～15:00(時間指定)

石州流讃岐清水派石州会 TEL 090-2826-9229

4/5 創立89周年記念茶会 玉藻公園披雲閣 1,000円
席主：金澤宗保・島上宗節・多田宗久 9:00～15:00
5/17 大西・アオイ花茶会 席主：土居宗美
大西・アオイ記念館 1,000円 9:00～15:00

煎茶道三癸亭賣茶流高松仙友会 TEL (087) 898-3655

5/31 三癸亭賣茶流高松仙友会 煎茶会(二席)
席主：北岡朱美(槇の間) 漆原好美(蘇鉄の間)
玉藻城披雲閣 2,000円 9:00～14:00(最終受付)

東讃茶道懇話会 TEL (087) 898-0391

3/15 月釜 席主：表千家流萌生会
池戸西徳寺 800円 9:00～15:30

武者小路千家香川官休会 TEL (087) 862-8574

〈香川官休会 月釜〉 無量寿院 1,000円 9:00～15:00
3/1 席主：在松会
5/3 席主：嶺松会

大西・アオイ記念財団 TEL (087) 880-7888

4/19 大西・アオイ花茶会
席主：武者小路千家香川官休会 小池公江
大西・アオイ記念館 1,000円 9:00～15:00
〈大西・アオイ高校茶会〉 大西・アオイ記念館 400円
3/21 席主：高松桜井高校茶華道部 9:30～15:30
3/29 席主：三木高校茶華道部 10:00～14:30

高松市香南歴史民俗郷土館 TEL (087) 879-0717

〈由佐城月釜茶会〉 第2研修室(和室) 9:30～14:30(全6席)
前売800円・当日900円/4月から前売900円・当日1,000円
3/15 席主：藤嶋宗季(茶道石州流宗家高松会)
4/19 席主：渡邊宗芳(裏千家川原宗津社中)
5/17 席主：大浦朋子・丸尾聡子(武者小路千家竹井恵子社中)

萩・津和野の旅

11月26日～28日に晴友会の研修旅行に行ってきました。きっかけは、出光美術館の徳留大輔先生のご講演で知った萩焼の現場に行ってみたくと始まりました。萩焼の深川地区に残る窯元を3軒を訪問いたしました。坂倉新兵衛窯、田原陶兵衛窯、新庄助右衛門

窯と行ってみると直ぐご近所でしたが、それぞれに特徴の違う作品で、さらに新たな試みも挑戦されていました。美味しいお茶もいただいてありがとうございました。

さて、パスツアーは、働き方改革もあって、泊まりを入れてもあまり遠くには行けません。何処か行きたい研修先があれば、事務局にご連絡下さい。積極的に検討いたします。



編集後記

三月、巣立ちの季節です。

街中には、胸にコサージュを付けた花束を持った卒業生たちが、笑顔いっぱい親御さんたちと歩いている姿を見かけます。

新年度には、進学される方、あるいは、社会人となられる方など、それぞれに希望と不安が入り混じっておられることでしょう。

香川から他所へ行かれる方や、逆に香川に来られる方に、離れて解るふるさと香川の良さ、住んでみて解る香川の良さを感じていただければともうれしいです。

暖かな陽射しに誘われて草木が花を咲かせるように、新しい一歩を踏み出される方々に良い春の訪れとなりますようにと願っています。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017
高松市番町二丁目一十二
公益財団法人中條文化振興財団編集部
TEL (087) 826-1335
FAX (087) 826-2212
info@chujo-zaidan.or.jp